

柳沢公民館 柳沢1-15-1 ☎042-464-8211 kouminkan@city.nishitokyo.lg.jp
田無公民館 南町5-6-11 ☎042-461-1170 tana-kou@city.nishitokyo.lg.jp
芝久保公民館 芝久保町5-4-48 ☎042-461-9825 shiba-kou@city.nishitokyo.lg.jp

谷戸公民館 谷戸町1-17-2 ☎042-421-3855 yato-kou@city.nishitokyo.lg.jp
ひばりが丘公民館 ひばりが丘2-3-4 ☎042-424-3011 hibari-kou@city.nishitokyo.lg.jp
保谷駅前公民館 東町3-14-30 ☎042-421-1125 ekimae-kou@city.nishitokyo.lg.jp

「未来図」の30年

みんなの声から、生まれる歌

開館30周年を迎えた昨年、柳沢公民館記念歌「ふれあいのうた」が生まれました。市民から寄せられた柳沢公民館にまつわるエピソードや公民館に対する思いなどの中から言葉を選んで歌詞をまとめ、作曲もしてくださった野口義修さんにお話を伺いました。

◆記念歌を提案した背景は？

西東京市に転居してきたのは柳沢公民館の開館(昭和62年4月)まもないころで、それ以来、執筆活動などの仕事をするのに「喫茶コーナーふれあい」(障がいがある人が働きながら市民と交流する場)を利用させてもらってきました。昨年、梅雨の時期に久しぶりに「ふれあい」に来たら、30年前と同じ女性が働いていて、対応に昔と変わらないあたかさを感じました。ああ、ここは僕の書齋だと実感し、感謝の気持ちから歌をつくって贈りたいとスタッフの方に話したところ、柳沢公民館が開館30周年であることがわかりました。そこで、記念事業の実行委員会に参加し、記念歌づくりを提案したのです。

◆二つの記念歌の関係は？

僕にとって「信じる力」と「ふれあいのうた」はひと続きです。「信じる力」は子どもたちや先生たちの思いを集めて歌にしたからこそ、歌い継がれる歌になりました。実際に言葉を寄せてくださった方の背後には何十

◆東伏見小学校の記念歌について教えてください。

平成18(2006)年、次女



のくちよしのぶ 野口義修さん

名古屋市出身。作曲家・著述家。作曲・編曲、音楽プロデュース、著述、音楽大学講師など多方面で活躍。

【著書】『作曲本～メロディーが歌になる～』(シンコーミュージック・エンタテイメント、2005年刊)ほか多数

【作品】「そーっと・そっと」(NHK「おかあさんといっしょ」)、「あいこでしょ」(NHK「みんなのうた」)ほか

【音楽プロデュース】あみん「待つわ」ほか
※公式ホームページ「よしの部」

◆柳沢公民館は市民が設計に参加しましたが、そのことも歌詞でふれていますね。

視聴覚室の床は、建設検討委員会で、数で押し切るのではなく、粘り強く話し合いを重ねて合意形成し、カーペットに決めたと聞きました。「この床やあの部屋も市民(みんな)の愛で思っている」という歌詞はそのことを伝えるものです。また、内装や外観など目立つところはもちろん大切だけれど、同時に、踏みつけられ、見下げられるものである床にも目を向けよう、そんな意味もこめました。

◆これからの抱負は？

音楽には力があります。歌は歌われることで感動をリアルに後世に伝えることができると思います。その意味で、各サークルの方が発表会で声と心を合わせて歌ってくださったこと、その素晴らしさに涙ができました。名古屋から東京に来て、西東京市に住むようになってから約30年。還暦を過ぎて、この地に何か残せないか、と思っていた

ことが、「ふれあいのうた」につながりました。

作詞、作曲ができない人はいない、というのが僕の基本的な考えです。今回、言葉を寄せた

方たちは、自分たちで歌をつくるという喜びを実感できたのではないのでしょうか。このまちは「歌の生まれるまち」にしたい。そう思っています。

写真で見る 田無町役場

旧田無市役所は、昭和58(1983)年11月に旧田無第一中学校跡地に建設された現在の田無庁舎に移転しました。



田無町役場 新築落成
昭和7(1938)年4月1日撮影
西東京市中央図書館地域・行政資料室所蔵



現在は、總持寺宸殿となっています。
撮影：松嶋 真(田無町在住)

わが街をもっと知りたくて

「ミニコミュニケーション」の「畑」

大谷 孝良さん



「農業体験農園」を知っていますか。普通の市民農園と違い、種苗や農具はすべて農家側が用意し、利用者は農家の指導のもとに決められた作物を育てます。利用者は年単位で契約料を支払うことで、自分の区画の作物を全量買い取る形となります。

北原町3丁目にある「農業体験農園きたつばら」(以下「きたつばら」)の園主、大谷孝良さんは農家の長男で、現在、家族3人(妻、母)で農業を営んでいます。「きたつばら」を始めて、今年で14年目。市の「農業体験農園」への補助事業がスタートした時は、ちょうど父親が引退し、大谷さんが宮農の中心になる節目の時期でした。販売のコストがかからず、一定の収益が保障される農業体験農園

は、農家側にも大きなメリットがあります。「きたつばら」がなかったら、大谷さんは現在の農地を保てていなかったと思います。「きたつばら」利用者は、たくさん獲れる野菜の調理法・保存法を学び合うために、「きたつばら野菜料理倶楽部」を立ち上げ、田無公民館の実習室で、年に2回活動しています。これまでに野菜料理はもちろんです、うどん打ちや、こんにやく作りにもチャレンジしてきました。講師は、利用者の中から募ります。大谷さんも教え合いの輪の中に入っているそうです。

農業を軸に、多様な人がつながる「畑」。今日もミニコミュニケーションがさまざまな実りをもたらしています。